

3/29(土)～30(日)

第17回聴覚障害者切手研究会切手展

✓概要

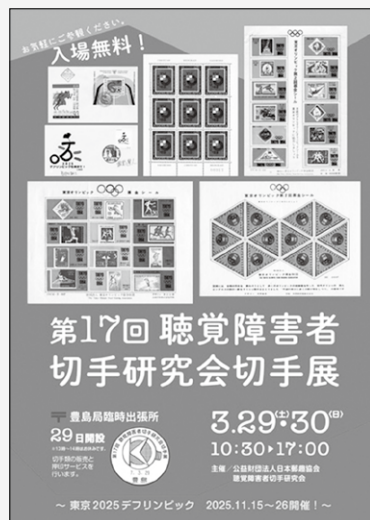
本展では、聴覚障害に関する展示や、当研究会メンバーの作品を展示します。聴覚障害に関する展示は、「ろうあ界の灯」、「山尾庸三」、「楽善会訓盲院関係書簡」などです。

さらには、11月15～26日に日本で開催される聴こえない人のオリンピック、デフリンピックに関する展示もあります。

メンバーの作品は、高木正美さんの「植物分類学者 牧野富太郎博

士を偲ぶ」(STAMP-SHOWフリースタイル切手展2024特別賞)や、私の「ドイツインフレ 1922-23」(JAPEX 2023 チャンピオンクラス出品)といった本格的な作品にくわえて、「灯台」、「極地」、「大阪万博」、「2020東京オリンピック」、「板東俘虜収容所」などは、メンバーが楽しみながら集めたコレクションです。

また、毎回小型印が使われ、小型印にちなむオリジナルフレーム切手や専用封筒を作成しています。



会期 | 2025年3月29日(土)–30日(日)
会場 | 3階スペース1, 2
時間 | 10:30-17:00

✓展示内容・みどころ

「オリンピックと聴覚障害者&デフリンピック」①は、オリンピックに出場した聴覚障害者およびデフリンピックを紹介します。

「ろうあ界の灯」は、ろうあ村長を始めとする、各界で活躍するも歴史に埋もれた聾啞の先駆者や、それを支えた関係者の掘り起こしを試みています。松下幸之助氏と聾啞者との関係もあります。当研究会以外からもマテリアル提供を

いただき、構成はオープン形式です。第1回から掘り起こしを進め、毎回改善しています。

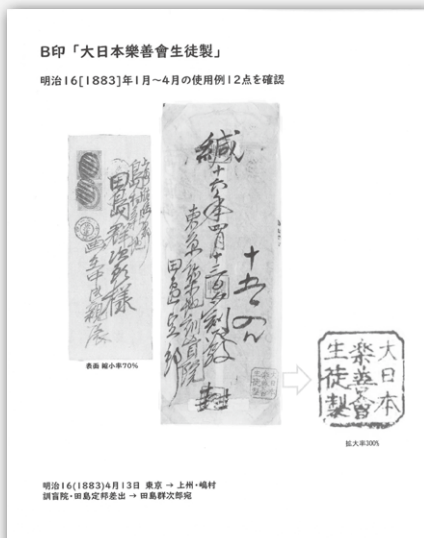
「楽善会訓盲院関係書簡」②は、訓盲院宛・差出の書簡を中心にオープン形式でまとめています。訓盲院は、現筑波大学聴覚特別支援学校・筑波大学視覚特別支援学校の最初の名称で、楽善会はその運営団体です。訓盲院の後身・東京聾啞学校が東京空襲で全焼したこともあり、訓盲院宛・差出の郵便

物は、『郵便史研究』第53号(2022)で報告されるまでその存在が知られていませんでした。大半の書簡裏に盲啞生徒が製造したことを示す印が押され、手紙には訓盲院の運営や身内の啞者への想いなど興味深い内容が記されています。

解説によって、展示の理解がより深まります。手話言語の出来る方が通訳しますので、聴こえないからと遠慮せず、ぜひ受付で声を掛けてください。(文・伊藤文久)



①「オリンピックと聴覚障害者&デフリンピック」より。



②「楽善会訓盲院関係書簡」より、訓盲院から差出された書状。